

# 持続可能な居住環境づくりにおける住民主導型プロセスの可能性

## ー 北欧・英国におけるコミュニティとワークショップを事例に ー

学籍番号 47-096744

氏 名 大川 裕司 (Okawa, Hiroshi)

指導教員 大野 秀敏 教授

### 1.1 研究背景と問題関心

近年、持続可能な居住環境づくりを目的とする様々な取り組みがある。北欧や英国の企業主導型のエコシティ開発などは先駆例として注目されている。一方、同じ北欧や英国では、規模は小さいが住民主導型コミュニティによる取り組みも盛んである。住民主導型では計画はもちろん、多くの場合建設も住民自らによって行われる。

住民主導型プロセスには、どのような特徴があり、持続可能な居住環境づくりにおいてどのような可能性を持つのだろうか。

### 1.2 研究の目的と方法

本論では住民主導型に注目し、その特徴や可能性を明らかにすることを目的とする。同時に、環境倫理学の議論を踏まえた学融合的な考察を試みることで、「持続可能な居住環境」や「建築におけるサステナビリティ」とは何かということに対し、一つの視点を付け加えることを目指す。方法として①まず住民主導型コミュニティ事例の訪問調査をし、参考として企業主導型と比較し特徴を明らかにし②住民主導型の建設現場でのワークショップを調査・分析し、考察を加えた。

### 1.3 調査対象

①の調査対象は住民主導型3例（オーダレン、ムンクスゴー、デュセキル）、参考

として企業主導型2例（ハマルビー、マルメ）、②の調査対象は7例の住民主導型の建設現場でのワークショップである。

2010年3月から2011年8月まで断続的にフィールドワークを行い、現地への訪問、住民や関係者への聞き取り、参与観察を行った。併せて文献調査を行った。

## 2. 企業主導型エコシティ

ハマルビーとマルメはスウェーデンを代表するエコシティ開発のモデル地域であり、環境負荷を減らすための統合的なインフラとシステムが特徴的である。住民は快適性、意識せずとも環境に良い生活ができるという点などを評価していた。スウェーデンはエコシティ開発のノウハウを輸出するビジネスも立ち上げている。

## 3. 住民主導型コミュニティ

デンマークではコーハウジングと呼ばれる住民主導による共同的な居住環境づくりの動きが1970年代に始まり、そこから派生してエコビレッジと呼ばれるエコロジカルなコミュニティ開発が始まった。これらのコミュニティでは施設や物の共有、夕食、家事、育児を共同でおこない無駄な消費や経済的・時間的な負担を減らそうとしている。食堂、洗濯場、育児室、ゲストルーム、ゴミ回収場などの施設を共有している。また共同で風力発電の導入、植物を

使った污水处理施設、カーシェアリング、共同農場などで、環境負荷を減らそうとしている。

また、コミュニティ内のニュースレター、全住民によるコンセンサス会議など、住民同士のコミュニケーションや意思決定の面での工夫も多い。住民は女性の働きやすさ、子育て、隣人との関係、負担の少なさなどを高く評価している。

### 住民主導型の課題

住民主導型は住民が総合的なエコロジーを求めて行われるため、小規模だが理想的な状態を作ることができる一方、政治的・経済的な後押しがなく住民が自力で行うために多くの手間や時間がかかり、普遍的なモデル化ができないという課題もある（ドーソン 2010）。

### 4. 住民主導型と企業主導型の比較

	企業主導型	住民主導型
1 技術	大規模／専門化	小規模／自己管理
2 方法	インフラ化／集合化／無意識化	習慣化／共同化／意識化
3 普及力	環境都市ビジネス	草の根運動
4 対象	富裕層向け	多様
5 環境の捉え方	自然的環境	自然的/社会的/精神的環境

### 5. 住民主導型の事例における建設技術に関する調査

住民主導型の事例で多く使われていた建設技術のうち7種類のワークショップに参加し参加者へのインタビューを行った。参加者の発言を傾向ごとにまとめていく。

1	欧式木造軸組構法（グリーンオーク）
2	藁俵構法（ストローベイル）
3	版築構法（ラムドアース）
4	荒壁土塑造構法（コブ）
5	茅葺き屋根（Thatching）
6	適正建設技術（地域資源利用）
7	廃棄物を利用した構法（アースシップ）

### 5.1 環境持続性に関する声

地域資源やリサイクル材・廃棄物の利用、すなわち製造・輸送エネルギーの低さ、廃棄後の環境への影響の少なさを、多くの参加者が評価していた。しかし生物資源（木材や茅、藁）の調達地域によって異なり、土も地域によって質が異なるため、いずれも地域毎に農業や自然資源管理のシステムを作ったり、技術の選択やローカライゼーションが必要だという認識も共有されていた。つまり地域資源の利用を原則とすれば、地域を越えて普遍的に応用できる技術はなく、地域の自然環境と、生業などの社会環境とのバランスの上に成り立つことになる。また、材料の出所や正体がわかりやすく、他の地域から環境的・社会的に収奪されていないことを評価する声も多かった。これは環境持続性に社会的な側面が加わった「環境の公正」（戸田 1994）に関する問題である。このような問題に対する意識的な選択が働くのは、生活者が当事者である住民主導型の特徴であると考えられる。

### 5.2 社会的な側面

藁や土などは経済的に入手が容易で、資源のアフオーダビリティやアクセシビリティという社会的な価値が評価された。

コブ、茅葺き、ストローベイルなどは、技術の習得が容易で力も必要なく「専門家だけでなく、素人でも」「男性だけでなく、女性でも、子供でも」建設に参加できるという特徴がある。そのため「住まいをつくるという人間の営みの場」において疎外されてきた非専門家や女性に関わることができ、「ソーシャル・インクルージョン」という価値の実現であると考えられている。

また、それらの技術は、扱いやすいが手間はかかるため複数の人々が1つの作業を共同で行うことが多い。そのプロセスが「コミュニティの共同性を作り出す」と評価され、また共同作業を潤滑にするためのコミュニケーションの工夫（チェック・インなど）が実践されていた。技術の持つ性質が共同体を可能にする(村上 1986)」とも言える。

## 5.1 精神的環境に関する声

前述したような作業に「誰でも参加できる」ことに対し、特に女性の参加者が大きな価値を感じ「エンパワーメント」「勇気が出る」「共有する喜び」などと評価された。また伝統工具を用いたゆっくりとした共同作業に「精神的に満たされる」「瞑想的」などの意見があり、評価されていた。建設現場の組立て工として働く人が、仕事では得られない楽しみのためにワークショップに参加しており印象的であった。

また、土や藁、木などの材料に対して、「癒やしの効果がある」「安心感」「親しみ」を感じるなどの声があった。

このような「建設技術における作業者としての体験」は、「請負労働者としての作業者」と「依頼者としての住人」が分離されている状況では問題にされない。作業者＝住人となる住民主導型のセルフビルドの現場において、初めて問題になってくる。内山(1989)の「広義の労働と関係性の回復」につながる問題である。

## 6. 考察

参加者の意識における以上の三つの側面は、ガタリの「三つのエコロジー」や井上(1997)の「環境持続性、社会的公正、存在の豊かさ」、日本学術会議環境学委員会

(2010)による「環境の持続性、社会の持続性、文化の持続性」と対応する。

住民主導型の開発においては、地域資源を利用するという環境持続性に関する価値があり、それを使って共に作業する中にある精神的充足やエンパワーメント性、癒やしといった精神的な価値があり、そして共同性の創出、ソーシャル・インクルージョンや経済的な公平さといった社会的な価値が一体となっていると言える。このような、「ローカルな自然環境との関係の中で社会的な意味と精神的な意味が分かちがたく結びついて存在する」という関係性は、鬼頭(1996)が「社会的リンク論」の概念モデルを用いて「かかわりの全体性」として表現したものに近い。では、なぜそのような「かかわりの全体性」がこれらの事例において実現しているのだろうか。「社会的リンク論」と「住民主導型プロセス」との関係性、また同論がいかに実践につながるのかを考察する。

自然環境的な側面	社会的な側面	精神的な側面
製造エネルギー 排出CO <sub>2</sub> 廃棄後の環境への影響 他の地域からの収奪がない	安く手に入る 誰でも参加できる 共同性を作る	エンパワーメント 自信・共有 精神的充足 瞑想的 癒やし・親しみ 安心感

フェリックス・ガタリ (1991)		
環境のエコロジー	社会のエコロジー	精神のエコロジー
井上有一 (1997)		
環境持続性	社会的公正	存在の豊かさ
鬼頭秀一 (2009)		
自然的环境	社会的環境	精神的環境
日本学術会議 環境学委員会 (2010)		
環境の持続性	社会の持続性	文化の持続性

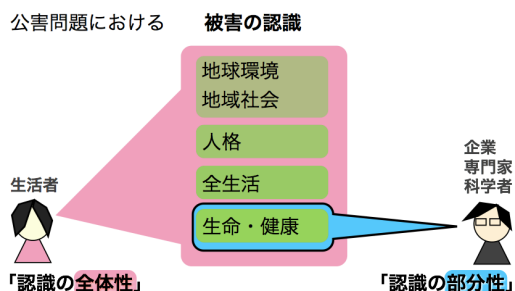
→ 概念の拡大が必要であるという批判

持続可能な居住環境とは？

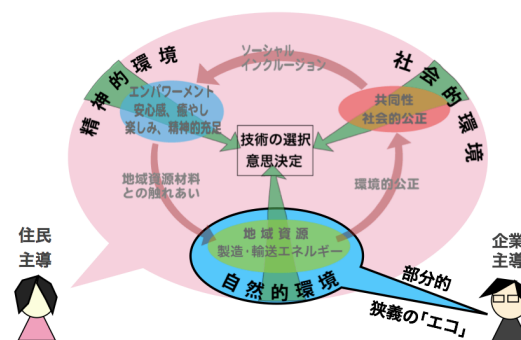
→ 建築におけるサステナビリティとは？

## 「生活者＝当事者の総合的な体験」という判断基準

住民主導型の最大の特徴は技術や手段の選択など全てのプロセスにおいて「生活者＝当事者の総合的な体験」という厳しい判断基準が介入するということである。ワークショップにおいても、技術の持つ精神的な要素、社会的な要素も含めて多様に総合的に捉えられていたが、それが可能であった理由は作業員＝生活者という当事者性にあった。つまり関わる人々にとっての「いきいきとした生き方」や「存在の豊かさ」という精神的な価値、そして「共に生きること」や「社会的公正」という社会的な価値につながるかどうかということが、選択の基準になっているのである。このことは生活者と専門家（科学者）との間にある「認識の全体性と部分性」の問題として指摘されてきたことと深く関係がある（宇井、飯島、鬼頭、戸田）。



このようにして、企業主導型における専門的・科学的、すなわち部分的な認識による「狭義のサステナビリティ」に対し、住民主導型アプローチの生活者が「生活者＝当事者の総合的な体験」という判断基準による「広義のサステナビリティ」の認識をしているため、自然的/社会的/精神的環境という総合的な視点から見て望ましい体験が伴う技術や方法が選択されたいと考えられる。



## 7. 結論

本論では、住民主導型プロセスにおける当事者の意識に注目することで生活者の持つ「認識の全体性」が、総合的なサステナビリティにつながるような「かかわりの全体性」を指向させているという関係性が認められた。このような生活者の持つ「認識の全体性」は、本論で扱った「持続可能な居住環境」ということに限らず、広く住民主導型のボトムアップ的プロセス全般の持つ可能性と優位性だとも考えられる。

また、環境倫理学の分野におけるサステナビリティ概念を巡る議論を受け止めるならば、居住環境や建築におけるサステナビリティの概念も、物質的な側面だけではなく、社会的、精神的な意味も含んだ総合的な概念に拡大されたものとして捉えられる必要があるだろう。

そして、そのような総合的なサステナビリティに向かうために、住民主導型のボトムアップ的プロセスの持つ可能性は評価されるべきである。「遅くて大変だが豊かな価値を持ったプロセス」を選択できる社会、それはイリイチの言う「プロダクティビティ（生産性）からコンヴィヴィアリティ（いきいきと共に生きること）」への転換でもある。

### 〔参考文献〕

ガタリ, F., 杉村昌昭訳 (1991) 『三つのエコロジー』, 大村書店.  
鬼頭秀一・福永真弓編(2009) 『環境倫理学』, 東京大学出版会.